

はたらきメダル

利用上の注意

武蔵野大学教養教育部会 教授

永作 稔

結果の読み取りをする際の注意点

「はたらきメダル」は学校の授業時間内で有効に活用していただけるように、また、子どもたちへの負担を考慮して、項目数を厳選しています。そのため、たとえば六角形で対極にある R と S がいずれも最も高い得点となる場合や、3 つ以上のコードがすべて同得点となるなど、一見すると矛盾しているように感じられたり、不思議に感じられたりする結果になることがあるかもしれません。同じホルランドの理論を背景とした、18 歳以上が対象の VPI 職業興味検査^{※1)}では、160 の検査項目から興味を測定し、タイプ分類をしています。したがって、「はたらきメダル」の項目数はそれよりもずっと少なくしていることから、こうした現象がより生じやすい仕様になっています。

※1) 日本語版は独立行政法人日本労働政策研究・研修機構が研究・開発し、日本文化科学社が販売しています。

●結果が矛盾しているように感じられる場合について

たとえば R と S といった、六角形で対極に位置するコードがいずれも最も高くなるというように、一見すると矛盾したように感じられる結果となることは、VPI を成人の方が受検した場合でもしばしば起こります。つまり、これは不自然な結果ということでは決してありませんので、どうかご安心ください。このような場合でも、今後の経験の積み重ねによって、自然と特定の領域に興味が定まっていくことが十分に予想されます。深刻に考えず、現時点で多方面に興味関心があること、それがその子の個性として現れていることの結果であるとお考えください。

また、上記以外でも、たとえば「自分の思っている自分らしさと出てきた結果が異なる」など、検査結果に疑問が生じることがあるかもしれません。その場合はむしろ、「はたらきメダル」という新たな側面からその子の個性が浮き彫りになった可能性があると考えてください。そして、「本当だろうか？」という視点をもってその可能性を吟味していただくことで、新たな自己理解や自己成長の機会としていただければと考えています。

●「いろいろタイプ」に分類されることの意味について

「はたらきメダル」では3つ以上のコードが同得点となった場合、「いろいろタイプ」と分類されるようになっています。これは受検者の興味関心が現時点で未分化であると解釈すべき結果であると考えています。これも特段の心配を要することではありません。

ホランドコードによる人の類型化（タイプ診断）は、確かな理論に基づいているものではありませんが、受検者の年齢が若ければ若いほど、タイプが柔軟に変化していく余地を残すものでもあります。その余地は、人と環境の相互作用によって次第に埋められ、確かな個性としてだんだんと確立されていくものです。人と環境の相互作用とは、たとえば、習い事を始めること、友だちとケンカしたり仲直りしたりすること、大切な出会いを経験することなど、さまざまな体験と、そこから得た学びの蓄積のことです。したがって、このような経験値のまだ少ない子どもたちの場合には、未分化であることがむしろ自然であるのかもしれません。「いろいろタイプ」に分類されることが、何かに劣るということでは決してないということを、子どもたちに是非くりかえし強調していただき、未来への可能性という白いキャンバスがより大きく広がっているのだと解釈していただければと考えています。

興味検査であり、適性検査ではないことへの注意

●興味（好き・嫌い）と適性（向き・不向き）は基本的に別のもの

「好きこそものの上手なれ」という言葉がありますが、“好きなもの”と“得意なもの”には強い結びつきがあります。得意であるということは能力の高さを意味しており、その領域での適性の高さに結びつきます。このことから、強い興味がある領域について、相応の適性が見込まれることも確かです。

しかし、こうしたつながりを踏まえた上で、興味と適性をしっかりと分けて考えることが重要です。野球好きの人がみな職業としてプロ野球選手になれるわけではないことと同様に、興味関心が高いからといってその職業に適しているということになるわけでは必ずしもありません。

一般的に適性検査と呼ばれる職業検査はいろいろとありますが、「はたらきメダル」はそれらとは異なるものであり、興味検査として開発されています。適性検査はたとえば「あなたは営業職が向いている」というような結果とともに、基本的にはたくさんある選択肢のうちから特定の職業領域に選択肢を限定していく方向で使用されます。しかし興味検査は選択肢を広げる方向、つまり正反対の方向で使用するべきものです。たとえば R タイプに分類された人が、同タイプの職業にはどのような世界が広がっているかを知ること、自分の気づいていなかった職業、知らなかった職業が世の中にはあり、それが自分と同タイプに分類されていることを知ること、新たな可能性に気づくきっかけとなるように使用されるべきものであると言えます。したがって、はたらきメダルの結果に基づいて子どもたちが将来の可能性を限定しすぎることをないようにご配慮ください。

●自分のタイプと異なるタイプの職業であっても、活躍できる可能性は大いにある

6つの職業タイプの境界線は、元来、ある程度ゆるやかに規定されています。つまり、はっきり白黒つくように分類されうるものではないということです。たとえば、現実的興味（R）領域にある職業が、社会的興味領域（S）にあたるような対人的な業務を全く行わないわけではありません。自分の個性に適した特定の職業興味領域でよりよく働くことができる人が多いことは事実ですが、とても柔軟に、さまざまな領域で活躍できる人もいます。したがって、自分のタイプと異なるタイプの職業を志望している場合であっても、悲観的にならずにその可能性を追求していくことの大切さを子どもたちには是非ご指導ください。